

あなたを待っている

ヤシの木が生い茂り、照りつける太陽と海の青さから、かつてここで戦争があったなんて、今の僕らには知るよしもない。だがしかし、あの老婆の一言が、私が日本人であることを思い出させ、今も心の隅で締め付けられるしこりを残している。

南の海は好き。釣り人的短絡的な発想で話をすればそこには魚がいっぱいいるから。都会の雑多の中で日々の生活を過ごす僕らにとって、南の無人島で過ごすことはとても貴重な時間である。

日本から真南へ赤道に近いところまで降ると、そのトピック諸島と呼ばれるミクロネシア共和国の二部が横たわる。今は手ピックと名前を変えたが、かつての第二次世界大戦で日本の占領下に置かれ、島の名は春・夏・秋・冬島と呼ばれる島々が集まっていた。

僕ら仲間が心を癒すために年に数度訪れていた無人島は、本島のモエノ春島(島から程なく離れ、東西へ2キロほど伸びたフラロ島)。この島は東西には伸びているものの、南北へはわずか100メートル足らずしかなく、タイフーンが来ればひとたまりもない場所。パン・ガローと呼ぶにはおこがましいハニック小屋に寝泊まりし、水や電気などは全くない。食料はモエノ島を離れる際に必要なものを買いそろえ、煮炊きをしてくれる人足と一緒に乗り込むという寸法だ。

風呂はスコール・トイレは海。灯油ランプの光にひと晩中友と語り明かし、日が出れば島のリーフからのキヌスティングで五目釣り。お昼になればハンモックでロロン。日が西に傾けば、夕日の大きさに圧倒されながらフライロッドを振り回し、釣りに明け暮れる。獲物の何匹かは夕食のこちそうにしてもらい、ヤシの葉の隙間から覗く満点の星空に、夜空の明るさを知る。

島の時間はいつだってお日様と一緒。思い思いの場所で過ごす仲間達も、太陽が西に沈む頃に戻ってくる。

「どっつ、今日は釣れたの?」

「いや、今日はダメ。」と私。

「この島の持ち主である、インターバーさんは流石のような日本語で話しかけてくる。彼女も飽きたし、僕らに日本人との会話を楽しんでるかのようだ。僕らがこの島へ来ると聞くと、わざわざ料理の腕を振るうために、一緒に島へ渡ってきたのだ。」

僕らが今夜のおかずを取ってこないことを知ると、彼女は天蚕糸の先に鉤の付いた素朴な仕掛けを持ち出してきた。フックにタベの残り物を絡めつけると、海へ向かって「イ」と投げ込んだ。そうして糸を垂れて夕日でも眺めようつか、という間もなく、獲物はすぐにかかる豊かな場所。

「あんたたちダメね、魚はこっつやって釣るのよ。」

年齢を重ねたシワ顔に笑みを浮かべて僕らに語りかける彼女。



こっつしてその夜も新鮮な魚とともに、炎を囲んでの仲間との語らいが始まった。

だが、すでに島へきて数日。魚の話も飽きたし何か話題をと、インターバーさんに昔の事を語ってもらった。春島の頂上付近にある、ナパロンの要塞のような大きな砲台のこと。山本インロクがこの海で死んだこと。この島にも慰霊碑があること。日本語は占領下時代に教わったことなどなど。

「インターバーさんはいくつの時結婚したの?」

と、私が訪ねた。すると彼女は遠くを見つめながら語り出した。

「私はね、20で結婚したの。相手はね、広島出身の日本人。ダンナサマとは恋愛結婚なのよ。子供ができ、幸せに暮らしていたのだけれど、ダンナサマは日本へ帰らなくちゃいけなくなり、返ったの。」

やがて子供も大きくなり、子供達がダンナサマの事を心配ししてくれたわ。だから私の子供達は日本へお父さんを探しに行ってくれたの。日本って大きいのね。広島に行けばすぐにわかると思っただけで、だめだったの。でもね、ダンナサマはきつと返ってくるって約束したの。何かの事情があった帰れないのよ。」

私ダンナサマが返ってくるまでいつまでも待っているわ。」

この年は戦後50年の時。その後、私の言葉は喉に詰まったままはき出すことができなくなった。

先日、パールバーがあるオアフ島の釣行で、島の住民に関西訛りで話しかけられた時、ふとインターバーさんのことを思い出した。彼女は元気でいるのだろうか。おしゃべりな住民の話をもよおし、見上げた空にはトラックと同じ青が広がっていた。

